

「スポーツは なぜ『感動』を呼ぶのか？」

いつの たくや
五野 琢也 ●フード連合・労働局長

間もなく「リオオリンピック」が開幕する。我が子達は、私の「昔取った杵柄」に巻き込まれ、半ば強制的に1年半前から卓球を習い始めた訳だが、4年前には全く関心がなかった福原愛選手や石川佳純選手らの活躍について、今回こそは「夢」と「憧れ」の眼差しで観戦してくれることを期待している。財政問題、政局不安定、ジカ熱、テロ未遂、ドーピング問題とまさに「波乱五重奏」の「五輪」ではあるが、とにかく「4年に一度のスポーツの祭典」であることに変わりはない。ぜひ国民に「感動」を与えてもらえるよう、選手の皆さんには精一杯頑張ってもらいたい。

先日、「スポーツはなぜ『感動』を呼ぶのか？」というコラムを読んだ。

「期待の上回り」をX軸、「顧客ロイヤルティ」をY軸とすると「 $Y=X$ 」、つまり一次関数が「満足」の状態であり、「 $Y=X^2$ 」のような二次関数の状態が「感動」だという。正直よく分からない解説だが（苦笑）、簡単に言えば「期待を大きく上回る時に『満足』から『感動』に変わる」ということなのだろう。

その背景には、甲子園に象徴されるように「ひたむきに『血と汗と涙』で打ち込んできた努力」や、イチロー選手などのように「常に『向上心』を持ち、現状に甘んじることなく『進化（変化）』をしてきた姿勢」があることはいうまでもない。さらには、「『4年に一度』という極めて限られた『機会』においてゴールが設定されていること」、そして「その機会での『結果』が求められること」が、より「共感・

達成感・喜び・悲しみ」を湧き起こすのだと勝手に分析している。

翻って我々、「労働組合の活動に『感動』を呼ぶ」ためには何が必要だろうか？

『血と汗と涙』は個人によって様々なので論じないが、『進化（変化）』をしてきた姿勢については大きな課題があると感じる。確かに戦後、労働運動が激化していた時期や、連合結成時などは「大きな変化」を遂げてきたが、昨今は単組にしろ、産別にしろ、ある程度の「ルーチン」「前年踏襲」の活動に追われているのではないだろうか。もちろん「哲学」や「思想」など『不変』なものを無理して変える必要はないが、一方で「戦術」や「手法」などは、常に検証し改善をしていくことが不可欠であることはいうまでもない。

また、『結果』についても不透明なところが多いと感じる。確かに「営業」のように定量化が難しい課題は多いが、その分プロセスを管理するとか、定性的課題を設定するとか、「達成感」を分かち合う「指標」を設定する必要性を感じる今日この頃である。

ベテランの労働運動家の「ジョーク」に次のような話がある。

それは、医者から「最近、運動はしていますか？」と問われ、「昔は激しく（労働）運動をしていましたが…（笑）」というものだ。

私自身、趣味の卓球と同様、「労働運動」にもしっかりと「汗」をかいていかねばと改めて思う。「血」と「涙」は出来れば流したくないものだが…